

カザフ草原の 「タンバル(タムガル)の岩絵」

坂井弘紀

— 要旨

中央アジア、カザフスタン共和国アルマトゥ州ジャンブル地区にある「タンバル Танбалы の岩絵」は、「タムガルの考古的景観にある岩絵群」として、2004年にユネスコの世界遺産に登録され、世界的に大きな注目を浴びている。これらの岩絵はペトログリフ（線刻画）であり、硬質の物体によって、岩肌を削って描かれたものである。この岩絵は、カザフ草原に暮らしていた人々が遺した芸術作品であり、中央ユーラシアの歴史と文化を考える上で、大きな資料のひとつとなっている。筆者は、本学部総合文化学科の科目「フィールド・ワークの実践2」で、当地へのフィールド・ワークを行った。本稿では、「太陽頭」と呼ばれる像と異形な風体の像を中心に、青銅器時代および初期鉄器時代に描かれた作品のいくつかを紹介したい。

カザフスタン共和国南部に「タンバル(タムガル)の岩絵」と呼ばれるたくさんの岩絵がある。ユネスコの世界遺産に登録されているこの岩絵は、カザフ草原に暮らしていた、いにしえの人々が遺した芸術作品であり、中央ユーラシアの歴史と文化を考える上で、大きな資料のひとつとなっている。青銅器時代および初期鉄器時代と中世期から20世紀にかけて描かれた数多くの作品の中でも、とりわけ「太陽頭」と呼ばれる像と異形な風体の像が目を引く。これらの図像は何にもとづいて、何を表現すべく描かれたのであろうか。

筆者は、2015年9月にこの地を訪ねた⁽¹⁾。数千年も前から長い時間をかけて多くの人々によって描かれてきた岩絵を実際に眼前で見ることができ、それらを写真におさめることができた。本稿では、日本ではほとんど知られていないこれらの岩絵について紹介するとともに、それらに何が描かれているかを考えることで、豊かなユーラシアの歴史と文化を理解する一助としたい。なお、本稿における写真は、特記ない限り、筆者撮影のものである。

1. 「タンバルの岩絵」について

カザフスタン共和国アルマトゥ州ジャンブル地区カラバスタウにある「タンバル Танбалы

の岩絵」は、「タムガルの考古的景観にある岩絵群」(以下「タンバルの岩絵」と表記)⁽²⁾として2004年にユネスコの世界遺産に登録され、世界的に高い評価を得ている。これらの岩絵はペトログリフ(線刻画)であり、石など硬質の物体によって、岩肌を削って描かれている。このような岩絵は、中央ユーラシアの各地に遺されている。中央アジアにはこの「タンバルの岩絵」があるカザフスタンのみならず、クルグズスタン、ウズベキスタンにも同様の岩絵がある。とりわけ、「タンバルの岩絵」はその数量と学術的価値により、ユネスコの世界遺産に数えられているのである。

筆者は、2015年9月18日にこの地を訪ねた。カザフスタンの「南の首都」アルマトゥから朝8時ころから車を飛ばし、11時過ぎには現地に到着した。アルマトゥからはおよそ170kmの距離である。すでに9月後半ではあるが、太陽は広漠たる大地を焼き、十分な水分を準備していなかったことを悔やむほどであった。「タンバルの岩絵」の入り口の案内板には、タンバルの保護地域への立ち入りが、同所の係員の許可なしには許されないこと、見学グループの人数は10-12名に、また第2グループから第5グループの岩絵群では見学人数が8-10名に制限されること、この一帯で火を起こすことや花や果実を採集すること、枝を折ることや狩猟、飲酒の禁止などが記されている。まず、「タンバルの岩絵」の中心的な図像が集中する第2グループから第5グループについて、それぞれの特徴を、現地の案内に従って紹介しておこう。

・第2グループ岩絵群 青銅器時代、初期鉄器時代

この岩絵群には400以上の岩絵がある。タンバル岩絵が古く表現力に富んでいることを示す、青銅器時代の図像が多くみられる。それらは、野生の動物(鹿、馬、牛、狼など)の姿であり、また空想的な姿(顔を隠した射手や「仮装者」)を含めた人の姿をした像である。図像は大きく(25-75cm)、深く鋭く刻まれている。スキタイ・サカ⁽³⁾の「動物意匠」の形式で描かれた動物像は紀元前1000年期的のものである。

・第3グループ岩絵群 青銅器時代、初期鉄器時代、中世期時代

ここには400を超える岩絵がある。青銅器時代(紀元前14-13世紀)のもので、それ以降の岩絵もある。それらは、野生ロバや山ヤギなど野生動物を狩る場面や牛の犠牲祭などにかかわりがある。とくに傑作は、牛に乗った「太陽神」と「孕んだ牛」である。後期青銅器時代(紀元前14-13世紀)の人間の犠牲も描かれている。サカ時代(紀元前5世紀中ごろ)に描かれた「動物意匠」の動物の像や闘斧をもった戦士が踊る姿も見られる。

・第4グループ岩絵群

岩絵が刻まれた岩壁によって、「野外神殿」がつくられていた。700以上の図像があり、青銅器時代(紀元前14-13世紀)の7体の「太陽神」が特徴的であるが、これら

は鉄器時代（紀元前6-5世紀）やそれ以降に加筆された部分がある。9-10世紀にはテュルク（突厥）文字が遺され、17世紀から18世紀中ごろには、オイラトの祈祷文が刻まれ、また19世紀初頭から20世紀にかけて、カザフの中ジュズ、ドゥラト族のタンバ（紋章）が記されている。

・第5グループ岩絵群

青銅器時代、初期鉄器時代、中世に描かれた岩絵群である。1000を超える岩絵があり、その多くが、青銅器時代（紀元前14-13世紀）に描かれた。体に線が入った牛や馬、猪などの動物、戦闘用の馬車やラクダがひく荷車、「太陽神」を含めた人型の像などである。モンゴルの鹿石やサカの動物紋様にみられる鹿の描写は紀元前1000年紀前半であると推定される。中世には、「饗宴のポーズ」で座る、頭部に後光を伴った人型の神の姿や騎馬民、鹿、テュルク諸部族のタンバが創られた。

ここで、「タンバルの岩絵」の研究史について簡単にまとめておこう。1957年9月19日、当時の考古学の第一人者であるアンナ・マキシモヴァをリーダーとする、カザフ共和国科学アカデミー（当時）の歴史・考古学研究所の調査団がこの地で岩絵を発見した。この岩絵は、まったくの偶然に発見されたものであるが、カザフ草原に住んでいた人々のもっとも古い痕跡として、大きな学術的意味をもっていることが明らかになった。この一帯は、2001年に共和国重要文化財に、2003年に国立文化歴史地区に指定されている。

タムガル地区のペトログリフの大部分は、メインの峡谷の下部に集中し、周辺地域のものも含めると5000点にもおよぶという。それらのうち学術的にもっとも興味深いものは、後期青銅器時代、すなわち紀元前2000年期中ごろのものと推定されるが、鉄器時代やそれ以降のものも学術的な意義をもっている。もっとも大きい図像の大きさは、1メートルぐらいである⁽⁴⁾。前2000年を少し過ぎたころから、中央ユーラシアの草原地帯でも銅よりかたい青銅がつくられるようになり、さらに前1300年ころから草原地帯の東部では、カラスク文化と呼ばれる後期青銅器文化が始まった。青銅器の生産は大きく進み、鋭利な短剣やナイフ、斧、馬具（銜と銜留め具）などがつくられるようになった。中央ユーラシアの草原地帯に騎馬が普及したのは、カラスク文化の後期（前10～前8世紀）と考えられる⁽⁵⁾。

岩絵には、太陽を頭とした神や尻尾のついた男、こん棒をもった戦士、夫婦らしき男女のペア、産婦など特徴的な姿が多くみられる。狩猟や犠牲祭の様子も数多く描かれている。

牛がひくながえ付きの牛車もあるが、馬とアルガル（野ヒツジ）が多い⁽⁶⁾。以下、いくつかのポイントにしぼって、代表的な図像を取り上げて紹介しよう。

2. 動物と人々

中央ユーラシアの草原地帯は、古来、騎馬遊牧民が駆け巡る世界であった。紀元前6000年紀に、農耕と牧畜の混合した文化がユーラシアの草原地帯に広がり、紀元前2500



図1



図2



図3

年ころからこの地域の乾燥化に伴って、農耕よりも牧畜に適した風土になっていった。前2000年を過ぎたころから、草原地帯でも青銅がつくられるようになったとされる。前10～前8世紀ころになると、青銅による馬具がつくられ、このころ騎馬遊牧民が生まれたと考えられる⁽⁷⁾。タンバルの岩絵にも、そのころに描かれたと思しき騎乗する人の姿が見られる。

図1は、騎乗する人を描いたもので、この地が古くから騎馬の民の土地であったことを示す格好の線刻画である。また、図2は彼らが狩猟文化をもっていたことを雄弁に語る図像である。右下の弓を引く人物は巨大な体躯の獲物に狙いを定める。狩猟文化はこの地域の基層を成す文化のひとつであり、狩猟文化は山岳信仰をはじめとする自然崇拝と深い関係がある。山の神へは英雄叙事詩が語られ、狩猟の成功や無事な帰還が祈念された。狩猟文化は、中央ユーラシアの伝統的な文化の礎であった。

図3には、動物の群れが列をなして移動している様子が描かれている。群れの姿はパターン化した形で描写され、芸術性の高さが感じられる。「タンバルの岩絵」を発見し、研究したマクシモヴァは「これらの像は写生的であり、遠い時代の生産能力の水準が反映されている」と述べてい

る⁽⁸⁾。

次に、第3グループ岩絵群の「孕んだ牛」(図4)を見てみよう。そこには、牛の体内にそれよりも小さな牛がいることがわかる。このたいへんユニークな図像は、いにしえの人々が子孫繁栄を願って刻み描いたとの説もあり、ユニークな想像力による芸術性が感じられる。太陽の光線によって、その色や輝きは変化し、きわめて美しい。



図4

この地の人々は現在でも動物と密接な関係をもち続けている。カザフスタンには、かつてのような「伝統的」遊牧生活を送る人はすでになくなってしまったが、放牧をしながら牧畜を行う人は少なくない。図5は、「タンバルの岩絵」へ向かう道中、偶然すれ違った羊の群れとそれを追う牧民の姿である。



図5

3. 「太陽頭」

さて、動物を描いた岩絵が多いタンバルの岩絵の中には、異様な姿の岩絵が少なからず見られる。丸い大きな頭をもった人型の図像である。ひときわ目を引くのはその円形の頭部であるが、これらはいずれも細部が異なるものの、太陽を現していると感じられる。研究上でもこれらの像を「太陽頭」と表現されている。こうした「太陽頭」は「タンバルの岩絵」では30体が記録されている(図6、図7、図8)。



図6

太陽頭の姿がさまざまであること



図7



図8

は、パンテオンが階段状（多層）のヒエラルキーからなっていることやこの地域の特徴を示しているという⁽⁹⁾。シャマニズムの神話的コンプレクスにおいては、宇宙空間が3つの成分からなっている「垂直多層的世界」であることや、それが「世界のバイテレク（世界の中心に生える「世界樹」）」とつながっていることが主要な位置を占めているが、こうした世界観は当時すでに彼らの中にあっただろうか。太陽をはじめとする天空にまつわる口頭伝承が、中央ユーラシアには多く伝わる。これらの岩絵も天空に関する伝承も、いにしえのこの地の人々の芸術的な想像力の産物であり、彼らが豊かな精神文化をもっていたということは疑いない。

なお、中央ユーラシア各地には二頭の馬の戦車の図像が多く残されているが、これらは、太陽信仰と強いつながりがあると指摘される。紀元前2000年紀中ごろに、ユーラシアの草原地域では、青銅器時代の騎馬民のなかで、幌馬車の戦車が発達した。ヘロドトスは『歴史』において、草

原の遊牧民マッサゲタイ⁽¹⁰⁾について「彼等は神々のうち太陽だけを礼拝し、それには馬をいけにえにささげている。それをいけにえにする理由は、神々のうちで最も早いものに配するのに、あらゆる死すべきもののうちで、最も早いものをもってするというわけである」⁽¹¹⁾と記している。「タンバルの岩絵」を描いた人々も、マッサゲタイと同様の文化や信仰をもっていたと考えられる。

4. 「神への儀式」

ところで、「太陽頭」は何を表し、意味したのであろうか。タンバルの一連の岩絵は、かつての騎馬民を取り巻く動物や環境が写實的に描かれているが、「太陽頭」のような存在が

実際に存在したとは常識的に考えられない。そこで想定されるのが、この「太陽頭」が太陽を擬人化した存在、すなわち「太陽神」を表したものであるとする考えである。図9を見てみよう。この岩絵は、「タムガルの岩絵」のもっとも注目しに値すると考えられるものである。青銅器時代、紀元前2000年ころに刻まれたと思われる、この切り立った岩壁に描かれた岩絵には、上部に二体の幻想的な「太陽頭」をした人型の図が描かれている。その下には幾頭かの動物が見られ、さらにその下部には人間らしき姿が広がる。

先行研究では、これは擬人化した太陽の顔をした巨大な神、すなわち「太陽神」に動物の犠牲を捧げる儀礼を人々が行っている場面を描いたものとされている⁽¹²⁾。ここからは、牛の骨も多く発掘されており、また開放的な草原にあって、声が遠くまで届きやすい地形であることから、犠牲祭が行われる神聖な場所であったのであろう。

見やすく模写した図10⁽¹³⁾では、下部に広がる12名の人々のうち、左に描かれる8人の人々が同じような背丈をしており、横一列に並び、片足を上げながら踊っているように見える。これは、儀礼の舞踊であると考えられる⁽¹⁴⁾。この8人のうち、左右ひとりずつを除いた6人の舞踏手は互いに手をつなぎ、脚は舞踏のリズムに合わせて大きく広げ、列をなして前進しようとしている。左右に立つ2人のポーズは、中間の6人よりはるかにめだつ。右端の人は、まさに曲芸めいた動きをしているように見える⁽¹⁵⁾。右端に見られる、特異な頭部の二人の人については、後述しよう。ちなみに、この12人の12という数は、



図9

「12の月」、すなわち一年を意味するとの説明もある。

これらの舞踏手たちに比べて、巨大な姿をした神々は擬人化されており、胴体は長い長方形で、腕と脚は細く、頭部は丸くて異常に大きい。その頭部は、光の点の輪で囲まれた日輪を表現しているようで、後光が射しているようである。「この画の隣に描かれた場面にも、太陽を頭とする巨人の姿が見えているが、脚をちょっと曲げており、また両腕も曲げて描かれている。そのため、体と両腕が呪術的な三角形を構成している。儀礼の舞踏において人体の各部分が構成する幾何学模様は、もろもろの宗教が混合した豊穰祭祀の特徴であり、地球上の諸民族にみられる」⁽¹⁶⁾との指摘がある。「太陽の顔をした生き物の前で儀礼の舞踏を行うという構図は、このタムガルイの聖域にみるように、青銅器時代特有の岩壁

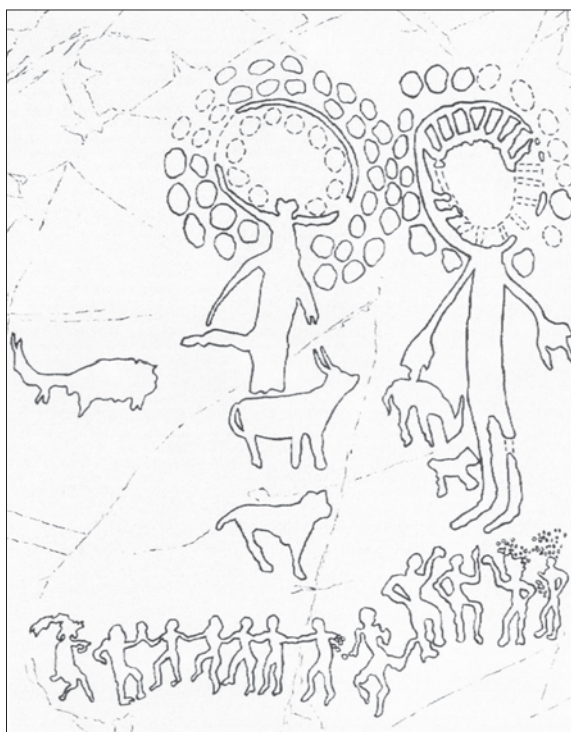


図 10

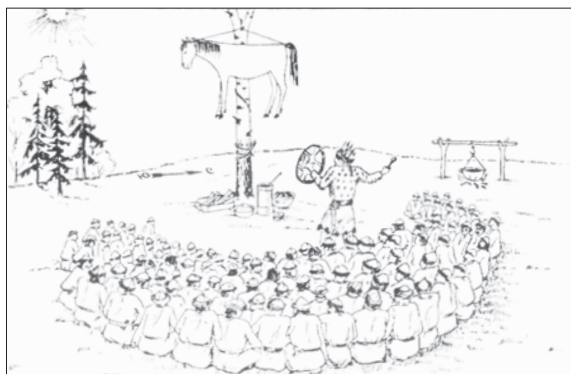


図 11

画の構図であり、全生命と成長、そして豊穰の源としての太陽にたいする崇拝をモチーフとして描かれたものである」⁽¹⁷⁾。また、中央に一つ目が描かれる丸い顔で、後光が頭に射す人型の像はミトラ神を描写したという説もある⁽¹⁸⁾。ミトラは、中央アジアやインド、イランの印欧系の人々が崇拝していた、頌歌に歌われる、もっとも古いインド・ヨーロッパ系の神格である⁽¹⁹⁾。宇宙創造神話では、太陽神ミトラに犠牲として供された「原初の牛」の体の一部から世界が創られたとされる。また、カザフには、創造主が大地と天空を創った時に、はじめ鏡のように丸かった大地を、「蒼い牛」が座布団のように四角い形にしたことから、創造主は「蒼い牛」に大地を支えさせたという神話がある⁽²⁰⁾。

中央ユーラシアの草原に暮らす人々は、テングリといわれる天神を信仰してきた。テングリは、はじめ天空を意味する言葉であったが、そこに神格が与えられ、崇拝の対象となると、テングリは「神」を示す言葉となる。そして、太陽もまたテン

グリの一部を成す重要な崇拜の対象として人々に崇められたのであろう。天神テングリはさまざまに擬人化され、これにまつわる多くの神話・伝承が生まれたが、「太陽頭」の「太陽神」もまた擬人化された神の姿であると考えられるのである。「太陽神」は世界各地において崇拜されてきたが、いくつもの「太陽神」の図像がこのように集中して、現在にまで遺されていることは珍しい。太陽の光をもつ人型の像は、初期の神を描いたのではなく、霊魂と神々が混交した姿であるとの説もあるが⁽²¹⁾、彼らの信仰や崇拜にかかわることは確かであろう。

神へのこのような儀礼は、中央ユーラシアの広範な地域で、その後も長く行われてきた。たとえば、アルタイのクマンディン人による、神へ犠牲を捧げ、頭に羽根らしき飾りをつけたシャマンの周りを人々が取り

囲み行っている儀礼の図 11⁽²²⁾ は、先に見た図 9・図 10 の様子とたいへん類似している。「(狩猟文化特有の) アニミズムは自然界のすべての存在に、つまり生命あるものにも生命なきものにも、魂を授けた。そこから導き出されたのが、狩りで殺した動物にその魂を返してやらねばならぬという発想であり、そのために折をみては動物の魂を慰め、自然界の諸力の怒りを静めるべく、慰霊の儀式が行われたのである」⁽²³⁾。

図 12 の「4 人の舞踏手の法悦の動きが特徴的」⁽²⁴⁾ な岩絵も儀式の様子を描いたものであろう。その手に、斧のような形状のものをもっており、儀式に何らかの目的で用いられたものと考えられる。神がかりになったシャマンの動きは、たとえばカザフ語では「バクス・オユヌ (バクス〈シャマン〉の遊び)」といい、シャマンの病人の治療も「バクス・オユヌ」と呼ばれた⁽²⁵⁾。この岩絵の人々もまたそうした動きを模写したものなのかもしれない。なお、この 4 人の踊る姿のモチーフは、古い伝承や岩絵にもとづいて作られた、現代カザフスタンの舞踏にも用いられている (図 13)⁽²⁶⁾。



図 12



図 13

5. 「呪術師」たち

図 14 に描かれた人の姿は、明らかに一般的な人間とは違う印象を受ける。手には道具をもち、毛の生えた衣装を身に着け、尻尾のようなものがつけられているようである。獣の頭をかぶったり、毛皮を身につけたりしたのであろう。こうした特徴的な衣装文化は、紀元前 3000 年紀はじめから紀元前 2000 年紀中ごろのものと考えられる⁽²⁷⁾。それらはアフアナシエヴォ文化⁽²⁸⁾ やオクニョフ文化⁽²⁹⁾ に近く、のちの北・中央アジアの草原地域のアンドロノヴォ文化⁽³⁰⁾ やカラスク文化⁽³¹⁾ との類似性も指摘される。アルタイ地方のシ



図 14

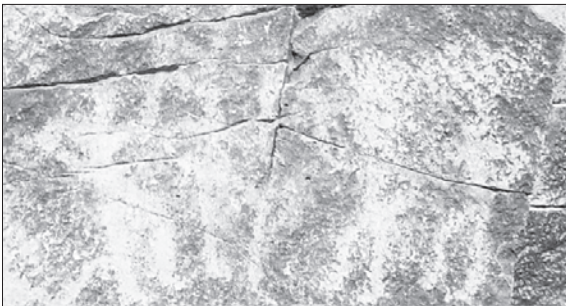


図 15



図 16



図 17

ャマンの上衣は、のろ鹿、マラル鹿、羊の毛皮で作られており、大きな鳥の特徴を表している⁽³²⁾。この異様な仮装者の姿は、後世のシャマンの装束へと発展していったのかもしれない。

岩絵のこの二人は、フランス、ドルドーニュ地方で発見された、アルプスカモシカの仮面と毛皮服を着て踊る、旧石器時代の「呪術師」と同様の役割を果たしたものと考えられる⁽³³⁾。もしシャマン自身が動物となって現れるシャマンの動物体験を、動物衣装で踊る後旧石器時代の呪術師と関係づけるとすれば、この古い呪術師は、少なくとも彼らの上衣を作るのにその皮を使った当の動物の「魂」に、場合によってとり憑かれていたかもしれないのである⁽³⁴⁾。

岩絵の二人の呪術者の腕も特異な形状をしている。手に何かをもっているととらえるのが妥当であろう。ブリヤートのシャマンは白樺の木か鉄で作った「馬」と称する杖を二本もっていたが⁽³⁵⁾、この二人が両手にもつものもやはり、儀式に用いられた道具であると推測される。

ここで、前章で取り上げた、「太陽

神」の前で行われる儀礼の図9、図10を振り返ってみよう。この図の下部には、12人の人々が躍りながら、儀礼祭を行っている様子が描かれているが、その右端の4人の舞踏している人物(図15)は、その左側の8人の人物とは大きさやポーズが異なっている。この4人は足を力強く踏み鳴らしているようでもあり、彼らは片手をあげ、別の手は腰にあてがっている。右の二人は頭に飾りをつけているように見える。この飾りは枝か毛皮、鳥の羽根と推測される。シャマンが身に着ける頭巾は「鳥の頭巾」と呼ばれ、細い鉢巻の上縁にみみずくの羽根をまっすぐに植えたものであるが(図16⁽³⁶⁾、図17⁽³⁷⁾)、これと類似する。あるいは、この被り物は、トゥングースやブリヤートなどのシャマンのように、鹿の角がついているともみなせるが、いずれにしても、このような被り物は儀式の際の「仮装」に不可欠なものであったのであろう。

先に見た、毛皮を身に着けて、変装したと思しき呪術者と同様に、彼らもまたシャマン的な役割を担い、神への儀式を司ったのではないだろうか。洞窟壁画の謎めいた場面に基づいて、シャマニズムは数万年前に生み出されたと想定する研究者もいる⁽³⁸⁾。シャマンの存在は本質的ではなく、信仰の対象とされる精霊こそが重要であるため、シャマニズムという名称自体が誤りで、精霊信仰と呼ぶべきであるとの意見もある⁽³⁹⁾。シャマンがいなくても、木や岩、川などの土地の風景が核となる精霊信仰が広く実践されているからである。しかしながら、シャマンの存在がこうした精霊信仰において重要な役割を果たしてきたことも事実である。シャマニズムの発生と発展については、多くの意見があるけれども、タンバルの岩絵に描かれた呪術者と思しき人々はシャマニズム、あるいはシャマニズム的世界観に基づく信仰や精霊崇拜と大きく連関するものであるだろう。

ちなみに、この岩絵の近くには「ベス・シャトゥル(5つの天幕)」と呼ばれる5つの小高く盛り上がった丘がある。古代の遊牧民の支配者の古墳(クルガン)である。紀元前6~7世紀ころのサカの王たちの古墳と考えられ、この巨大な古墳は、数あるクルガンの中でも最大級の大きさであり、クルガンは巨石が取り囲むように置かれ、その権力の大きさを誇っている。かつては、スキタイ・サカ文化は西方より東方へ伝播していったとの考えが主流であったが、近年では、スキタイが東方の内陸アジア北部の草原から移動してきたという、スキタイ・サカ文化の東方起源説が有力となってきている⁽⁴⁰⁾。「タンバルの岩絵」があるカザフ草原がその文化の中心地のひとつであったことは確かなことである。

6. 「タンバルの岩絵」と「タムガル・タス」

最後にこの遺跡について、注意を喚起しておきたいことがある。それは、「タムガル」と一般的に呼ばれる、この世界遺産とは全く別の場所に「タムガル・タス」の名前⁽⁴¹⁾で知られる岩絵群があるということである。アルマトゥから北へ120km、カプチャガイ湖方面に向かった、イリ川河岸に「タムガル・タス」はある。「タムガル」、すなわち「タンバルの岩絵」とは方向も異なり、互いに遠く離れているが、その名称が類似することと岩絵が多



図 18

と思い、車を走らせたのだが、世界遺産の「タンバルの岩絵」ではなく、誤ってこの「タムガル・タス」に行ってしまった。現地の人にもほとんど知られていないため、このような混乱がしばしば生じるので、十分気をつけなくてはならない。

世界遺産ではないものの、この「タムガル・タス」にもまた興味深い岩絵が遺されている。「タムガル・タス」でとくに注目すべきは仏教岩絵（図 18）である。描かれた正確な年代は不詳だが、「10 世紀に仏教の伝道をしていた一行がイリ川の岸に停泊していると、大きな地震が起これ、巨岩が大地に落ちてきた。これを、帰国を告げるお告げと一行は理解した。その巨岩には三体の仏の姿が刻まれていた」という伝説が伝わる。「タムガル・タス」の仏の絵は、著名なカザフの近代知識人ショカン・ワリハノフによって、1856 年に模写されている⁽⁴³⁾。自然崇拜・精霊信仰のみならず、さまざまな宗教・信仰が、この地で盛んであったことを、岩絵は教えてくれるのである。

おわりに

以上、ほとんど知られることのない、「草原の芸術家」の作品について紹介した。発見から半世紀余り、研究もまだ十分には進んでいない「タンバルの岩絵」は、世界遺産に登録されたことや、カザフスタン国内における観光環境の整備が進んだことにより、徐々に世界的に知られるようになってきた。今回のフィールド・ワークにこの地を選んだのも、そうした背景がある。

中央ユーラシアの草原に暮らしてきた人々の芸術表現は、口承文芸において高く発展してきた。口承文芸を知ることは、彼らの文化を深く知るために不可欠であるが、今回紹介したような岩絵や古い遺跡から出土する考古学的遺物もまた、中央ユーラシアの精神文化を知るための大きな材料なのである。中央ユーラシアの文化研究においては、今後、こうした「目に見える」資料と口承文芸のような「目に見えない」資料、双方を取り入れた複合的な研究を進めていく必要があるだろう。

く残されていることから、しばしば混同される。たとえば専門書にも、「アルマトゥから北へ 120 キロメートル、イリ河谷の東岸に、世界遺産に登録された岩画遺跡、タムガル・タスがある。(略) 太陽のような頭を持つ人間も描かれている」⁽⁴²⁾ と、両者を混同した記述が見られる。筆者もおおよそ 10 年前に「太陽頭」の岩絵を見よう

—注

- (1) 表現学部学科基礎科目「フィールド・ワークの実践2」で行ったフィールド・ワーク（2015年9月15日～25日）の成果の一部である。
- (2) 現地では、カザフ語、ロシア語、英語のいずれの言語においても、タンバル Танбалы（「印のある」の意）と表記されているのだが、一般的には、タムガルの名称で知られている。タムガとはテュルク・モンゴル系の言語で「印章・烙印」を意味する言葉である。
- (3) 紀元前9～前4世紀にかけて中央ユーラシアで活躍した騎馬遊牧集団。
- (4) *Казахстан-страна чудес*, 2011, 64-67.
- (5) 林俊雄、2014年、14～15ページ。
- (6) *Казахстан-страна чудес*, 2011, 64-67.
- (7) 林俊雄、2014年、14～15ページ。
- (8) *Всеволодская-Голушкевич*, 1996, 14.
- (9) *Қазақстан ұлттық энциклопедия 6*, 219-220.
- (10) 前7～前4世紀にカスピ海北岸から中央アジアにいた遊牧騎馬民集団。スキタイと同系と考えられる。
- (11) ヘロドトス、1943年、135ページ。
- (12) *Қазақстан ұлттық энциклопедия 6*, 219-220.
- (13) カロマトフ他、1987年、39ページ。
- (14) *История Казахстана*, 29.
- (15) カロマトフ他、1987年、38ページ。
- (16) 同上。
- (17) 同上。
- (18) Кузьмина, 1986, 119-120. *История Казахстана*, 28
- (19) ミトラの主要な機能は、世界の調和が支持されているか、契約が守られているかを見守ることである。
- (20) *Бабалар сөзі* 78, 2011, 264.
- (21) *Қазақстан ұлттық энциклопедия 6*, 219-220.
- (22) Норрал, 2014, 117.
- (23) ミハーイ・ホッパール、1998年、18ページ。
- (24) カロマトフ他、1987年、40ページ。
- (25) *Всеволодская-Голушкевич* 1996, 31.
- (26) Указ. соч., 92.
- (27) *Қазақстан ұлттық энциклопедия 6*, 219-220.
- (28) アファナシエヴォ文化は、前2500年ころから前1800年ころまでの銅石器文化最盛期の草原地帯東部の文化。この当時、西アジアから車行文化が伝わった。
- (29) アファナシエヴォ文化に続く、青銅器時代の文化。
- (30) アンドロノヴォ文化は、前1800年ころから前1500年ころまでの文化。インド・イラン系文化で、農耕牧畜複合経済であった。中央アジア南部や中国北部にも広がった。
- (31) カラスク文化は、前1300年ころから前800年ころの後期青銅器文化。特徴的な青銅短剣が中国北部から黒海北岸まで分布する。
- (32) Уно・ハルヴァ、2013年、184ページ。
- (33) Финдайзен、1977年、扉函。
- (34) 同上、文献及び注3ページ。
- (35) Уно・ハルヴァ、2013年、213ページ。
- (36) 同上、188ページ。
- (37) Норрал, 2014, 48.
- (38) ミハーイ・ホッパール、1998年、18ページ。
- (39) Дейвидд・ハリソン 2013年、259ページ。

- (40) 林俊雄、2007年、78、100 ページ。
- (41) これも、正しいカザフ語では「タンバル・タス Таңбалы Тас」である。
- (42) 宇山智彦他、2015年、80～81 ページ。
- (43) Валиханов, 1985.

——参考文献

宇山智彦、藤本透子編著『カザフスタンを知るための60章』明石書店、2015年。
カロマトフ、ヴィズゴ、メシュケリス他『人間と音楽の歴史 中央アジア』音楽之友社、1993年。
シャルル・ステパノフ、ティエリー・ザルコンヌ『シャーマニズム』（遠藤ゆかり訳）創元社、2014年。
林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社学術文庫、2007年。
林俊雄『遊牧国家の誕生』世界史リブレット98、山川出版社、2014年。
デイヴィッド・ハリソン『亡びゆく言語を話す最後の人々』（川島満重子訳）原書房、2013年。
ウノ・ハルヴァ『シャーマニズム2』（田中克彦訳）平凡社東洋文庫、2013年。
フィンダイゼン『霊媒とシャーマン』（和田完訳）冬樹社、1977年。
ヘロドトス『歴史 上巻』（青木巖訳）生活社、1943年。
ミハイ・ホッパール『図説シャーマニズムの世界』（村井翔訳）青土社、1998年。

Noppal, Mihay (Macarcadan çevirenler Bülent Bayram), *Avrasya'da Şamanlar*, İstanbul, 2014.

Бабалар сөзі 78: қазақ мифтері, Астана, 2011.

Валиханов, Ч.Ч., *Собрание сочинений в пяти томах, том 3*, Алма-Ата, 1985.

Всеволодская-Голушкевич О.В., *Баксы ойыны*, Алматы, 1996.

История Казахстана, Алматы, 1993.

Кузьмина Е.Е., *Древнейшие скотоводы от Урала до Тянь-Шаня*, Фрунзе, 1986.

Қазақ бақсы балгердері, Алматы, 1993.

Казахстан-страна чудес, BW-KZ, Астана, 2011.

Қазақстан ұлттық энциклопедия 6, Алматы, 2004.